

〈拡張された心〉 仮説の道具主義的転回

神崎 祥輝 (Shoki Kanzaki)

一橋大学

ノート上のメモ書きは、そのノートの持ち主自身の外部記憶ないし外部信念である。たとえば、我々は脳内に記憶を留める代わりに、ノートという外部記憶を参照しているのかもしれない。また、音楽や絵画などの芸術作品は、その制作者の外部情動である。たとえば、優れた芸術家は、自身の身体を用いて情動を表出する代わりに、自ら生み出した作品を用いて情動を表出しているのかもしれない。このように、我々を取り巻く環境中に実在する人工物を、その利用者自身の外在的な心的状態や心的プロセスと捉える〈拡張された心〉仮説は、Andy Clark と David Chalmers によって提唱された (Clark and Chalmers 1998)。以来、この仮説は、認知主体と環境の相互作用を捉えた認知科学理論として、4E 認知科学をはじめとする現代認知科学の一派から注目を浴びている (4E 認知科学: Enactive、Embodied、Embedded、Extended の頭文字を取ったもの)。概して、認知科学の研究においては、脳内の神経活動だけではなく、脳以外の身体や身体を取り巻く外的環境との相互作用を考慮に入れなければならないと考える流派のことを指す)。加えて〈拡張された心〉仮説は、認知科学研究の枠組みを超えて、概念工学などのより実践的な文脈においても支持されている (Cappelen 2018)。

他方で、〈拡張された心〉仮説の認知科学理論としての妥当性に対しては、数多くの論者から批判が突きつけられている。とりわけその中でも、Fred Adams と Kenneth Aizawa による〈認知の徴〉に訴えた批判は、〈拡張された心〉仮説を全面的に棄却しようとする根強い批判である (Adams and Aizawa 2001=2010)。〈認知の徴〉とは、対象が認知的あるいは心的なものといえるための条件である。その条件の一つは、Adams と Aizawa によれば、対象が単一の因果的基盤へと還元されることである。

しかし、単一の因果的基盤への還元は、強すぎる要求である。というのも、一般に科学的探究の目的は、実在する基礎的な因果法則への還元には尽きないからである。Adams と Aizawa の不当に強い要求は、〈諸現象は単一のマイクロ物理学的な法則へと還元できる〉という実在論を前提としている。戸田山和久 (2009) によれば、科学の目的には、基礎的な因果法則への還元のみならず、我々にとって有用な説明ないし予測モデルの構築といったものもある (あるいは、そうしたモデル構築も含むものとして、〈還元〉という概念を捉え直すべきである、と戸田山は提案する)。ここで〈モデル〉とは、実在する世界を単純化したレプリカのようなものである。モデルは実在世界の性質を全て写し取ったものではないが、それでも観察対象である諸現象の予測や説明の役にたつ点で、科学的探究を支えている。こうした道具主義的な科学観の下では、〈拡張された心〉仮説を妥当な認知科学理論として擁護する余地は残される。というのも、Clark ら〈拡張された心〉仮説の擁護者が近年行なっているのは、能動的推論のフレームワークや自由エネルギー原理といった情報理論に依拠しつつ、心および〈拡張された〉心のメカニズ

ムの説明ないし予測モデルを与えることと読めるからである (Clark 2015=2022, Constant et al. 2022)。能動的推論のフレームワークおよび自由エネルギー原理によれば、自由エネルギーと呼ばれる情報量の最小化およびその帰結としての予測誤差の最小化こそが、心のメカニズムである (Parr et al. 2022)。たしかに、心が実際に自由エネルギーの最小化メカニズムとして駆動しているのかという点について、能動的推論のフレームワーク (および自由エネルギー原理) は多くの論者から懐疑の目を向けられている。しかし、Clark らの試みを、实在論的な試みすなわち〈(拡張された) 心のメカニズムの物理学への還元〉ではなく、道具主義的な試みすなわち〈(拡張された) 心のメカニズムの物理学的なモデル化〉だと捉えなおそう。そうすれば、上記の批判を回避しつつ、なおも〈(拡張された心) 仮説を認知科学の範疇に位置づけることができるのではないだろうか。

最後に、〈(拡張された心) 仮説の道具主義的転回〉は、改訂された〈心〉の概念として〈(拡張された心) 〉の概念を社会実装していくための礎石にもなりうる。こうした概念の改訂作業を〈概念工学〉と呼ぶが、冒頭でも触れた通り、その創始者の Cappelen は概念工学としての〈(拡張された心) 〉仮説の支持者である。というのも、人工物を外在的な心的状態や心的プロセスとみなすことは、脳機能障害を抱えた人々などにも通常の心的状態や心的プロセスを帰属できるという、実践的に望ましい帰結が見込まれるからだ。とはいえ、〈(拡張された心) 〉という概念が〈心〉についての我々の常識的理解や科学的理解とあまりに乖離したものであれば、社会に普及しない。〈(拡張された心) 〉仮説を道具主義的な認知科学理論として位置づけることで、〈(拡張された心) 〉の概念が当初の想定ほど受容困難なものではないことが示され、普及への第一歩となる。

参考文献

- Adams, F. and Aizawa, K. (2001) "The Bounds of Cognition", *Philosophical Psychology*, 14-1, 43-64.
- . (2010) "Defending the Bounds of Cognition", In Menary, R et al. *The Extended Mind*, MIT Press.
- Cappelen, H. (2018) *Fixing Language: An Essay on Conceptual Engineering*, Oxford University Press.
- Clark, A. and Chalmers, D. (1998) "The Extended Mind", *Analysis*, 58-1, 7-19.
- Clark, A. (2015) *Surfing Uncertainty: Prediction, Action, and the Embodied Mind*, Oxford University Press.
- . (2022) *Extending the Predictive Mind*. *Australasian Journal of Philosophy*, 102(1), 119-130.
- Constant, A, Clark, A, Kirchhoff, M, Friston, K. (2022) *Extended Active Inference: Constructing Predictive Cognition beyond Skulls*. *Mind & Language*, 37(3), 373-394.
- Parr, T., Pezzulo, G., Friston, K. (2022) *Active Inference: The Free Energy Principle in Mind, Brain, and Behavior*, MIT Press.
- 戸田山和久. (2009) 心の科学におけるモデルと還元, 〈特集〉認知科学におけるモデルベースアプローチ, *人工知能*, 24-2, 260-267.